# Newsletter 18

## 日本比較文学会中部支部　2017 年春号

**巻頭言**

### 日本比較文学会第 41 回中部大会シンポジウム報告

平林美都子（愛知淑徳大学）

昨年日本は戦後 70 年周年を、そして今年は参戦から 75 周年を迎えた。今回のシンポジウムのテーマ「戦争（争い）における記憶と忘却のナラティヴ―和解に向けて」はこうした「戦後の日本」をことさら意識したわけではなく、ある英国小説中の「集団的記憶」と「集団的忘却」からヒントを得たものだった。ところがテーマを掘り下げていく過程で、1990 年以降の「記憶」への関心が 20 世紀前半に起こった世界大戦、その後の被植民国の独立、難民問題など、侵略や紛争による共同体の統一や解体、再生への希望と密接に結びついていることに気が付いた。まさに日本の戦後を意識せざるを得なくなったのである。現在の政治的立場から日本は常に「敗戦国」「被災者」の面が強調されがちだが、今回のシンポジウムにおいて、戦争（争い）の記憶は実際にはもっと複雑かつ縺(もつ)れたものであることを各報告者の発表から再認識した次第である。

まず平林は司会者の立場から記憶と忘却理論を概説し、共通テーマを整理した。「記憶ブーム」の背景、「集合的記憶」の提唱者アルヴァックス、戦争の集合的記憶がいかにナショナリズムと結びつき、共同体意識を強固にするのか、あるいは特定の出来事が隠蔽されたり忘却を強いられたりするのかを概観し、記憶の対概念としての忘却へ言説がシフトしていることに言及。さらに赦しと正義の区別すべき問題系にも触れた。

最初のパネリスト杉浦清文氏は「引揚者と（旧）植民地の記憶―森崎和江

の詩と「いのち」について―」と題する報告で、戦後の日本において「加害者意識」をも背負わされた植民二世森崎の原罪意識を後年の詩集『ささ笛ひとつ』から考察した。森崎の原罪意識は、まず他者との「ダイアローグ」から出発し、自然との「共振」へ向かい、さらには自分の内に異質なものを生かそうとする「他者との共存」の願望へと深化して「いのち」への想いへと繋がっていくことを検証した。

次に姜信和氏は、「玄基榮（ヒョンギヨン）の語りの可能性と不可能性―「順伊（スニ）おばさん」を中心に―」と題し、済州島四・三事件を初めて告発した短編小説「順伊おばさん」の文学史的意義と記憶の再構成について発表した。30 年間の沈黙後に出版されたこの小説は韓国で禁書になり、日本で金石範（キムソクボム）によって翻訳されて四・三認識の基本的書物となった。事件の告発に始まり、玄基榮は加害者に向けられるべき憤怒、被害者の心の治癒、両者の和解と犠牲者の鎮魂を一貫して追求し表象する。しかし、作品中の赦すと同時に忘れないという二つの命題は、現実には折り合いのつけにくい難問である。対極的な文体で特徴のある玄吉彦（ヒョンギロン）を挙げ、両者の語りと歴史認識の差異について、「正史」をめぐる時事問題にも触れて報告した。

北米文学を専門とする戸田由紀子氏は「死者について語る物語―イーデン・ロビンソンの『モンキー・ビーチ』」と題する発表で、カナダ西海岸のハイスラ族の個人の記憶物語が政府の先住民同化政策の影響を深く受けていることを当該小説から考察した。とりわけ先住民に対する強制的な寄宿学校制度は文化的ジェノサイドとして先住民の自尊心に大きなダメージを与えることになり、話題にしてはならない体験として扱われている点にも触れた。死者は失われた先住民文化のメタファーとなり、死者を語る物語は生者に癒しを与え、喪失した魂を取り戻す作業になっていくことを論じた。

迫害/死者の物語は神話化されてしまうのではないかというフロアからの指摘やナラティヴに含まれる「沈黙」については、発表者全員が共有する問題系ではあったが、残念ながら時間切れとなり議論は深められなかった。重いテーマではあったが、今後さらに論議が発展する余地のあるシンポジウムの内容だったと感じている。

# 日本比較文学会　第 42 回中部大会のご案内

日時：２０１７年 5 月 13 日（土）
場所：名古屋大学文系総合館カンファレンスホール
〒４６４-８６０１　名古屋市千種区不老町　地下鉄名城線「名古屋大学」駅下車
名古屋大学ＨＰ　東山キャンパスマップ　Ｂ４④の建物です。
http://www.nagoya-u.ac.jp/access-map/index.html/

１１：３０－１２：５０　幹事会（文系総合館７階オープンホール）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大会進行：　中京大学　杉浦　清文
１３：００　開会の辞：　愛知県立大学　松本　三枝子

１３：１０－１４：４０　研究発表（発表 30 分、質疑応答 10 分）

1. ユートピアへの眼差し

―「アサイラム」と「アジール」をとおして―

発表：加瀬佳代子（金城学院大学）
司会：藤岡伸子　（名古屋工業大学）

2. 莫言文学における川端康成の受容―文学の動物表象をめぐって―

発表：　谷 金榜（名古屋大学大学院）
司会：　星野　幸代（名古屋大学）
（休憩　10 分）

１５：００－１７：３０　シンポジウム「**巷説と文学**」

司会：金城学院大学　小松史生子

パネリスト：

斎藤喬（南山宗教文化研究所）
今井秀和（国際日本文化研究センター機関研究員）
中川千帆（奈良女子大学）

１７：３０　閉会の辞：　岩田和男（愛知学院大学）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１７：２０　総会（会計監査報告）　名古屋大学　星野　幸代
１８：００　懇親会　司会：　林 正子

（グランピアット山手通店：名古屋市昭和区 1-24　052-834-8973）
【日本比較文学会会員以外の方々のご来場も歓迎いたします。】

## 第 42 回中部大会　シンポジウム

**「巷説と文学」**

**小松史生子（金城学院大学）**

柳田国男は 1926 年に刊行した『山の人生』について、後年、「何故書かれたか、主旨がどうも分らないといつた人があるが、無理もない話で、じつは法制局で知つた珍しい話を喋りたくてたまらないものだから、そんな本を書きはじめたわけであつた」（『故郷七十年』1959 年）と述懐している。彼の『山の人生』はむろん民俗学領域の遺産であろう。しかし、1920～30 年代において日本近代文学は民俗学領域の言説と深く交錯し、そこから栄養を得てきた経緯がある。噂、巷説、事件報道といった体裁で紡がれる言説は、どのような過程を以て“文学”と名指されるジャンルに成っていったのだろう。また或いは逆に、文学としてあった言説が、いつのまにか“巷説”となって世間に流布する構図も考えられよう。本シンポジウムは、こうした巷説と文学の往還運動を具体的な資料体で可能な限り捉えてみたい。

「もう一つの四谷怪談――実録小説から口演速記へといたる巷説の表象」

斎藤喬（南山宗教文化研究所）

本発表は、落語家春錦亭柳桜の口演速記『四谷怪談』（一二三館、1896）を軸に、怪談噺の「四谷怪談」の系譜における巷説の表象の変遷について考察するものである。これには原話となった実録小説『四ッ谷雑談集』（1727 とされる）があり、ここでは特に実録小説がどのようにして怪談噺のフォーマットで翻案されることになるかを検証する。また、当時流布していた「お岩の怨念」の怪異譚にまつわる巷説の集成という側面を持つ実録小説においては、その記述の内部でまさしく巷説そのものがルポルタージュとして語られているということを念頭に置きながら、そのような巷説の表象がどのような形で怪談噺に流れ込んでいるのかも合わせて検証していく。

「〝捨てられない人形〟の噂と文芸―江戸随筆、荷風日記、そして怪談『生き人形』―」

今井秀和（国際日本文化研究センター機関研究員）

現代の人形怪談には、捨てることができない／人の元に戻ってくるという要素を持つものが少なくない。こうした話のルーツの一つとしては江戸怪談を想定することができる。たとえば江戸後期の噂話を多く集めた随筆『耳袋』には、予言する人形の話がある。この話には、ある一定の作法に則らなければ人形を捨てることができないという呪的なルールが含まれている。予言する人形は、おそらく元々は口寄せ巫女などの民間宗教者が有する「憑き物」的な存在であった。本発表では江戸期から近現代に至るまでの〝捨てられない〟人形怪談の文化史を紡いでみたい。

「ニューイングランドの魔女と魔女を語る女たち」

奈良女子大学　中川千帆

アメリカ社会を描くモチーフとして、アメリカの作家たちはセイラムの魔女裁判をとりあげてきた。しかし、女性の作家の描く魔女の物語は、女性同士の物語であり、また女性と社会の関係を問いかける物語である。本発表では、20 世紀初頭の 2 人の女性作家 Edith Wharton と Esther Forbes によって書かれた魔女の物語に注目し、噂話の力と共同体の力学を考察する。彼女たちの小説では、魔女は社会への反逆者として称えられておらず、女性と女性のあいだの葛藤の産物となっている。魔女裁判の歴史研究を参考にしながら、これらの小説に見られる、女性が女性を糾弾する意味やその動機、そして彼女たちの言葉が社会に対して持つ重さについて考えたい。女性同士のいざかいという私的な出来事は、魔女として訴えることにより公的な領域の問題となることだとも考えられる。女性が私的な領域から公的な領域に出ることと、噂話そして超自然物語との関係についても分析を展開するつもりである。

## 第４２回中部大会　研究発表要旨

### ユートピアへの眼差し―「アサイラム」と「アジール」をとおして―

加瀬佳代子（金城学院大学）

柳田國男に始まるサンカ研究や、それに続くサンカ文学は、サンカの姿をロマン主義的に描き出すことで、都市化や階級社会への対抗概念とした。その「語り」からは、「アサイラム」の外に「アジール」を求める書き手のイデオロギー性が読み取れる、といえそうだ。が、ドイツ語の“Asyl”、フランス語の“asile”、英語の“asylum”は、ギリシア語の“ἀsulon”を語源にもつ派生語であり、ともに「避難所」を意味する。しかし、日本のアカデミズムの別領域で受容されると、「アサイラム＝全制的施設」、「アジール＝平和的避難所」として定着した。対照的な定義とは裏腹に、使い手の関心は通底しており、これら二つの術語は、常に社会批判の言説内に見受けられる。差異は、その先にある「ユートピア」への眼差しに現れるが、理想を目指す「アサイラム」内の闘争言説が有力になる一方、「アジール」は、その空間とともに力を失いつつある。

### 莫言文学における川端康成の受容　―文学の動物表象をめぐって―

谷 金榜（名古屋大学大学院）

（1 字下げ）中国のノーベル賞受賞作家・莫言は、日本人初のノーベル文学賞作家川端康成の影響にしばしば言及している。例えば、川端康成『雪国』の「黒く逞しい秋田犬がそこの踏石に乗って、長いこと湯を舐めていた」という文からインスピレーションを受け、短編小説「白い犬とブランコ」を「高密県東北郷原産のおとなしい白い犬は、何代かつづいたが、純粋種はもう見ることが難しい」と書き出したという。この小説で、莫言の文学的領地たる「高密県東北郷」に登場した「白い犬」は、莫言の初期の小説に現れた動物と異なり神秘性を持っている。さらにそれ以降の小説では、多くの魔術的リアリズムの動物が現れるようになる。本研究では、莫言文学が川端康成の『雪国』をどのように受容しているかを検討した上で、「秋田犬」から「白い犬」を経て「白い犬とブランコ」以降に登場する動物に至るまで、動物表象はどのように拡大され、莫言文学においてどのような意味を持っているかを考察してみたい。

# 支部長便り

松本三枝子（愛知県立大学）

このところの中部支部の状況として、研究発表者が多様になっていることが挙げられる。年に 2 回開催される中部大会では、毎回 2 件の研究発表が採択されている。同大会ではシンポジウムもあるので、シンポジウムのパネリストとその他の研究発表者とが世代により分かれる傾向にあった。つまり、中堅以上の研究者がシンポジウムのパネリストとなり、若手あるいは新進の研究者が研究発表に応募するという状況が長く続いていた。しかしながら、最近は研究発表に、‘mature’な研究者の応募が続いている。これは大変嬉しい状況であり、歓迎している。

シンポジウムは、特定のテーマのもとに討議が進むので、その研究分野における最新の状況などがわかり、有益であるのは勿論である。例えば、前年度のシンポジウムのタイトルは、「戦時期日本における半植民地・植民地の音楽・舞踊表象」、「戦争（争い）における記憶と忘却のナラティヴ――和解に向けて」であった。いずれも、ポストコロニアルな現在の状況から多面的に表象文化を読み解き、戦争の世紀であった 20 世紀をどのように振り返り位置づけるのかをテーマとした刺激的なものであった。

その一方で、研究発表は発表者の研究状況の「今」が報告されることになる。10 年前に比べて、昨今の大学の教員は多忙を極めている。大学における管理運営業務は増大して、教育・研究活動を圧迫している。加えて、大学の運営交付金はマイナスシーリングの状況なので、常に外部資金の獲得を求められている。このような状況で、中堅以上の大学人は毎日のように事務書類を読み作成している。ほとんどの大学人が何かしらの管理職に就き、貴重な時間を大学運営のために費やしている。前述した‘mature’な研究者たちは、まさにそのような渦中にある方々だ。どのように多忙であっても、またどのような立場にあっても、研究の前線に留まっていることを証明するのが、研究発表である。真摯な一研究者として、研究の現状を公表する研究発表がこれからも続いていくことを願いながら筆を置くことにしたい。

## 2017 年度の中部支部役員

支部長：　松本三枝子（愛知県立大学）
代表幹事：　福田眞人（名古屋外国語大学）
事務局長：　星野幸代（名古屋大学）
編集委員長：　メベッド・シェリフ（龍谷大学））
会計監査：　田所光男（名古屋大学）
幹事：

| | | | |
|---|---|---|---|
| 岩田和男 | （愛知学院大学） | 林正子 | （岐阜大学） |
| 工藤貴正 | （愛知県立大学） | 平林美都子 | （愛知淑徳大学） |
| 小松史生子 | （金城学院大学） | 藤岡伸子 | （名古屋工業大学） |
| 杉浦清文 | （中京大学） | 星野幸代 | （名古屋大学） |
| 長澤唯史 | （椙山女学園大学） | メベッド・シェリフ | （龍谷大学） |

※支部運営についてのご意見やご提案など、役員の誰にでもお気軽にご連絡下さい。研究発表のお申し込みも随時受け付けております。また、みなさまのご意見・ご連絡等をコンスタントに集約するため、メールでの連絡窓口も設けています。hikaku-chubu@googlegroups.com をご利用下さい。

## 事務局からのお願い

### ■ご異動、お引っ越しなどに伴う登録情報の変更について：

ご異動、お引越しなどに伴う登録情報の変更がありましたら、速やかに本部事務局長　中直一先生（naka@lang.osaka-u.ac.jp）、及び下記中部支部事務局にご連絡下さい。近年、本部で作成する名簿が支部へ送付されなくなり、照合や修正に手間取ることが多くなっています。ご面倒ですが、本部と支部の両方へご連絡下さいますよう、どうぞ宜しくお願いいたします。

日本比較文学会中部支部ニューズレター第 18 号
2017 年 4 月 24 日発行
発行人　松本三枝子
編集担当　メベッド　シェリフ
発行　日本比較文学会　中部支部
事務局　〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B4-5(700)
名古屋大学大学院人文学研究科
星野幸代研究室
TEL/FAX:052-789-4875
E-mail:　hoshino@lang.nagoya-u.ac.jp